（様式 12）

氏　名（本籍）　浦　啓修（和歌山県）
学 位 の 種 類　博士（歯学）
学 位 記 番 号　甲　第 336 号
学 位 授 与 日　2017 年 3 月 15 日
学位授与の要件　博士の学位論文提出者（学位規程第１１条第１項該当者）
学位論文題目　「Le Fort I 型骨切り術による上顎骨の前上方移動が外鼻形態に与える影響」

論文審査委員　（主査）教授　嶋田　淳
（副査）教授　奥村　泰彦
（副査）教授　須田　直人
（副査）教授　村本　和世

論文内容の要旨

顎変形症の診断，治療方針の決定ならびに治療結果に際して，さまざまな装置を用いた三次元的計測が行われるようになり，より詳細な解析が可能となってきた．

本研究は，三次元 Computed Tomography（以下，CT）データの重ね合わせで得られた顎変形症患者における上下顎同時移動術前後の硬組織および軟組織変化量を計測することにより，解明されていなかった硬組織変化量と外鼻形態変化との関係を明らかにすることを目的とした．

骨格性下顎前突症の診断のもと Le Fort I 型骨切り術ならびに下顎枝矢状分割術を施行した顎変形症患者 14 例（男性 4 名，女性 10 名）を対象とした．研究資料は，手術前と術後 6 か月経過時に撮影した CT データを用い，三次元画像解析ソフト（SIMPLANT®O&O）を用いて解析した．計測点は，前鼻棘，鼻尖点，鼻柱，鼻下点，上唇の最突出点とした．計測値は，術前・術後の硬組織，軟組織の各計測点の直線的な移動量，水平方向，垂直方向への移動量の変化を測定した．計測値の統計学的検定は，一元配置分散分析（one-way ANOVA）を行い，群間比較には post-hoc テストとして多重比較検定の Tukey's multiple comparison test を行った．相関関係については，Pearson による相関分析を行った．また，相関関係が認められた場合，単回帰分析を行った．

得られた結果として，前鼻棘の移動量と軟組織の移動量の間に有意差を認めなかったが，前鼻棘と軟組織の移動量間には有意な相関が得られた．また，単回帰分析にて軟組織変化量を従属変数（y），硬組織変化量を独立変数（x）とする一次回帰式が得られた．回帰式の係数より前鼻棘の移動に対して軟組織の移動は，垂直方向よりも水平方向への移動が大きくなることが明らかとなった．

論文審査および試験結果の要旨

以上のことからCTデータの重ね合わせで得られた顎変形症患者における上下顎同時移動術前後の硬組織および軟組織変化量を計測することにより，硬組織変化量と外鼻形態変化との関係を明らかにする基礎情報を得た．その結果，顎変形症患の治療方針の基礎データとして重要な役割を担う基準となり得るものと考えられる．論文審査ならびに申請者・浦　啓修に対する実験は，2017年1月27日に主査・嶋田　淳，副査・奥村泰彦教授，須田直人教授ならびに村本和世教授により実施した．主論文の内容に関しては口頭試問を行い，語学試験は大学院入学試験の英語の筆記試験とした．その結果いずれも合格した．

よって，申請者：浦　啓修は，博士〈歯学〉の学位を授与されるに値するものと判断した．